

「善い人はその心の良い倉から良い物を出し、悪い人は悪い倉から悪い物を出す。およそ心から溢れ出ることを、口は語るのである。」（ルカ6：45）

「私のもとに来て、私の言葉を聞いて行う者が皆、どんな人に似ているかを示そう。それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて家を建てる人に似ている。洪水になって水がその家に押し寄せたが、しっかり建ててあったので、びくともしなかった。」（ルカ6：47～48）

主イエスは「悪い実のなる良い木はなく、また、良い実のなる悪い木もない」と言われる。確かに、良い木が良い実を結ぶが、人間に当てはめた時、疑義を感じる。それは、育ちの良い人が良い行いをするとは限らない。逆のことがしばしばある。悪い環境で育った人が悪いことばかりをするとは限らない。驚くような良いことをするのを、私たちは見ている。善と悪は単純に二分することはできず、複雑に絡まっているのが現実ではないか。二分されてしまうと、悪い木でも良い実を結ぼうとしている人は希望を失くしてしまい、私などは立つ瀬がなくなってしまう。続く「木はそれぞれ、その実で分かる。茨からいちじくは採れず、野ばらからぶどうを摘むこともない」という言葉は理解できる。木はそれぞれの実を結ぶのであって、他の実を結ばせることはあり得ない。この譬えの結論は、「善い人はその心の良い倉から良い物を出し、悪い人は悪い倉から悪い物を出す。およそ心から溢れ出ることを、口は語るのである」である。口から出る言葉は心から溢れ出るものであるから、心の倉が良いものか、悪いものかによって、人を生かす肯定的な言葉か、人を苦しめる否定的な言葉に分かれると言われる。良い心の倉を持ちたいと願うが、それは、主イエスの愛を思い巡らすことによって育てられるのではないか。

「私を『主よ、主よ』と呼びながら、なぜ私の言うことを行わないのか」と言われる。信仰深そうに「神様、神様」と言いながら、行いは神の御心とは反対のことを行っている。ファリサイ派の人々は、言葉では神を第一にしているようだが、実際は、神の思いから遠く離れているとの皮肉である。そこで、主イエスのもとに来て、主イエスの言葉を行う者が、どんな人に似ているかを示そうと、一つの譬えを語られた。「それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて家を建てた人に似ている。洪水になって水がその家に押し寄せたが、しっかり建ててあったので、びくともしなかった。」イスラエルは乾燥した土地なので、砂が堆積してできた地質である。家を建てる場合、地面を岩のある所まで深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて家を建てる。そうすれば、洪水になって水が押し寄せてきても、岩の上に建つ家は堅固に守られる。主イエスの話を聞いても行わない者は岩を土台とせず、砂の上に家を建てた人と似ている。洪水が押し寄せると、家はたちまち倒れ、無残な壊れ方をする。主イエスは、聞いて「行う」ことを強調しておられる。パウロは、行いではなく信仰によって義とされることが福音であると説いた。これは、ファリサイ派の人々の見栄を張った形式的な行いを戒めたのであって、ローマ書10章10節で「実に、人は心で信じて義とされ、口で告白して救われるのです」と書いている。口で告白するとは行いで現わすということである。パウロほど、主イエスに聞いて行った人はいない。信じて義とされた喜びは行いを生み出していく。それが、主イエスの救いに与る祝福である。このことを、心に留め、岩の上に家を建てる者でありたい。